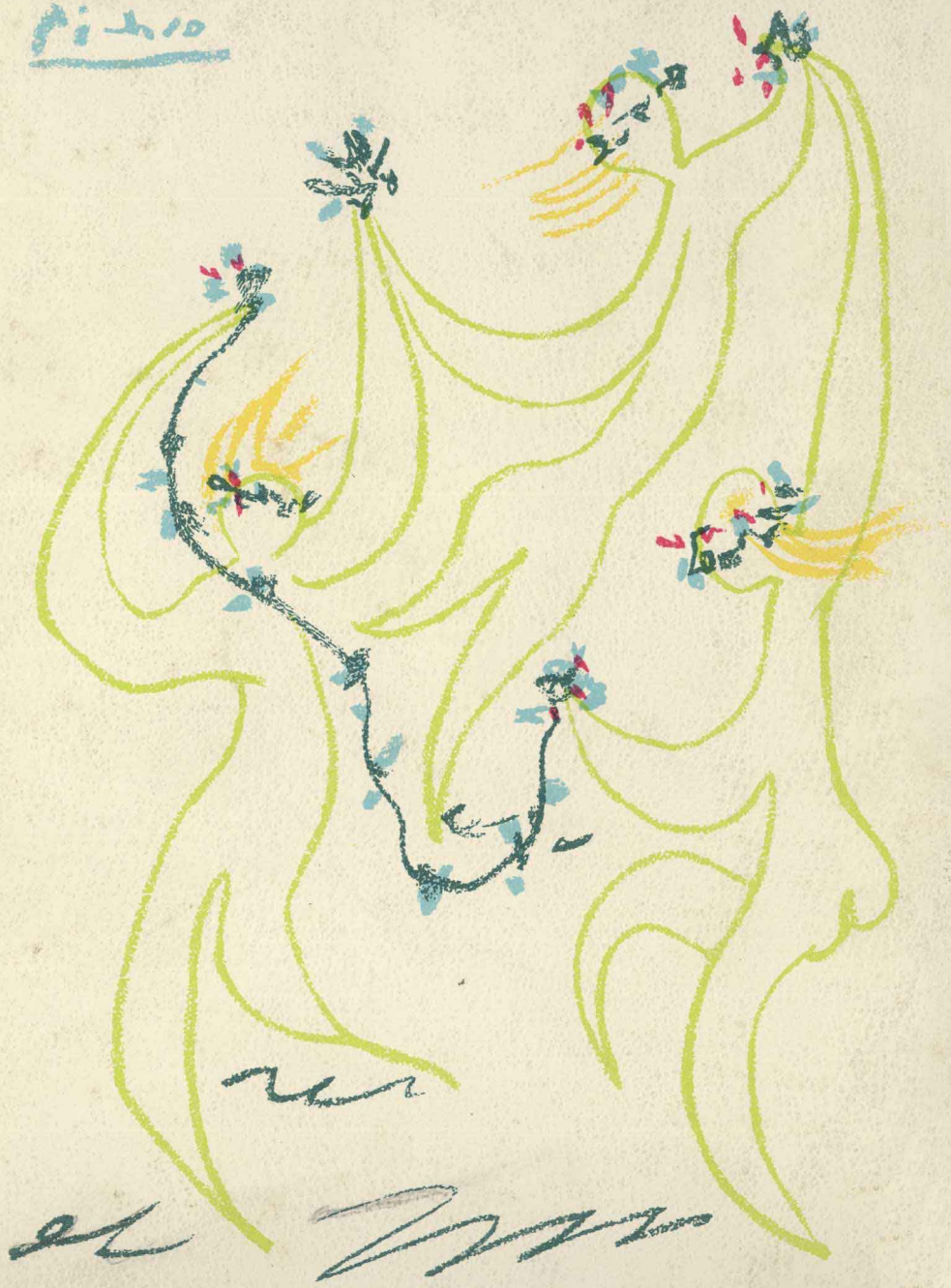


Pichio



ノーベル賞 文学全集

NOBEL PRIZED
LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

主婦の友社

ノーベル賞文学全集 15

スタインベック

アグノン

訳者 大橋吉之輔
佐藤 亮一
大浦 暁生
村岡 崇光
平田 圭子
野崎 孝

授与演説および受賞演説の収録に際し
ては、集英社のご厚意を得ました。

昭和46年9月5日 発行
発行者／石川 数雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号 101
振替 東京 180 番
電話 東京(03)294-1111(大代表)

印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
製 函／凸版印刷株式会社

目次

スタインベック

選考経過……シエル・ストレムベリイ……………	平田圭子訳……………6
授与演説……アンダーシュ・エステルリング……………	野崎 孝訳……………11
受賞演説……………	野崎 孝訳……………13

トータイヤ・フラット……………	大橋吉之輔訳……………15
-----------------	---------------

真 珠……………	佐藤亮一訳……………123
----------	---------------

短 編(『天の牧場』より)……………	大浦暁生訳……………165
--------------------	---------------

『天の牧場』について……大浦暁生……………	……………167
-----------------------	----------

サメのウィックス……………	……………168
---------------	----------

小蛙ツラレシート……………	……………180
---------------	----------

モリー・モーガン……………	……………189
---------------	----------

人と作品……フロム・ウェーバー……………	平田圭子訳編……………203
----------------------	----------------

著作目録……………	大浦暁生編……………392
-----------	---------------

アグノン

選考経過……シエル・ストレムベリイ……………	村岡崇光訳……………218
授与演説……アンダーシュ・エステルリング……………	村岡崇光訳……………221
受賞演説……………	村岡崇光訳……………222

丸ごとのパン……………	村岡崇光訳……………227
-------------	---------------

操の誓い……………	村岡崇光訳……………237
-----------	---------------

テヒツラ……………	村岡崇光訳……………299
-----------	---------------

イドとエナム……………	村岡崇光訳……………325
-------------	---------------

永遠に……………	村岡崇光訳……………365
----------	---------------

人と作品……ノエ・グリユス……………	村岡崇光訳編……………379
著作目録……………	村岡崇光編……………396

肖像画／ミッシェル・コーヴエ……………	4、216
カラーさしえ／フォンタローサ(スタインベックの作品)……………	16、17、64、65、80、81、88、89、104、105
ビエール・ルロイ(アグノンの作品)……………	232、233、328、329、352、353

ジョン・スタインベック

一九六二年受賞（六十歳）
（アメリカ一九〇二～一九六八）

トーティヤ・フラット

真珠

短編

「天の牧場」より

サメのウィックス

小蛙ツラレシート

モリー・モーガン



John Steinbeck

スタインベック

選	授	受
考	与	賞
經	演	演
過	說	說

スタインベックに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官

シエル・ストレムベリイ

ジョン・スタインベックは、アメリカ人作家としてノーベル賞を受けた六番目の作家である。彼はすでに四十歳のときから、他の二人のアメリカ人作家とともに、この大賞の候補に挙げられていた。他の二人というのは、ウィリアム・フォークナーとアーネスト・ヘミングウェイで、どちらも彼より一足先に、フォークナーは一九四九年度、ヘミングウェイは一九五四年度のノーベル賞を受賞することになった。

すでに一九五四年の際にも、次のような批判の声があがって、大方はそれを正しいものとしたのである。その批判というのは、アメリカの新しい文学流派は、ジョン・ドス・パソスとともに近代的文体小説の開拓者というべきウィリアム・フォークナーがすでに受賞しているのだから、同じ流派からまた受賞者を出すのはあまりに寛大すぎるというものであった。

真の芸術家フォークナーと並べてみると、ヘミングウェイはむしろ今日の現実にたずさわる才気煥発なレポーターというわけである。

ジョン・スタインベックの候補資格もヘミングウェイと同様の、いやもっと強い反対意見に出会った。にもかかわらず、毎年毎年最高会議の委員によって彼の名が挙げられていたのである。

そして一九六二年、激しい競争にもかかわらず、とうとう栄光の日がやってきた——十月二十五日、スウェーデン・アカデミーはノーベル文学賞を、「現実主義的であると同時に豊かなイメーजीに富み、暖

かなユーモアと鋭い社会認識を特色とする、その文体のゆえに」ジョン・スタインベックに与えることを決定したのである。
候補者のリストには六十六名もの人々が挙がっており、論戦は活発なものだった。

ところでこの五年間、ノーベル文学賞の栄誉はラテン文学とスラヴ文学が独占的に得ていた——すなわちスペインのヒメネス、フランスのアルベール・カミュ、サン・ジョン・ペルス、イタリアのクワジモド、ロシアのバステルナーク、ユーゴスラヴィアのアンドリッチである。

諸民族がつねに平等の機会を持つことをつねに配慮している選考委員会において、ことはアングロ・サクソン文学がスウェーデン・アカデミー会員の注目をひくのは当然であり、ましてその地方が価値ある候補者にこと欠かないとなればなおさらであった。

イギリスではグレアム・グリーン、オルタス・ハックスリー、とくにロバート・グレイヴスの名が早くから挙げられていた。この三名にさらに、あの名高い小説群『アレキサンドリア・カルテット』の作者であるローレンス・ダレルの名が加わる。この小説は完結したばかりだったが、彼の名はいたるところで、この時代の最も著名な小説家のひとりとして讃えられていた。とりわけ、形容詞の最上級が文学批評の常套句ともいえるスウェーデンにおいては、そうであった。

アメリカ合衆国においてもまた、選択には迷うほどであった。もしスタインベックがドス・パソスやトーマス・ウルフ等すぐれた小説家をさしおいて、あるいはまたエズラ・パウンド、ロバート・フロスト、カール・サンデルバーク等抒情詩人をさしおいて選ばれたとすれば、それは彼の社会小説や、アメリカ大陸におけるベスト・セラー作家としてよりも、むしろ一九四二年の小作品『月は沈みぬ』によって、彼はスカンジナビア諸国においては、非常に好意的な見方をされていたことによるものと思われる。この作品は占領下のノルウェーへの、美しき献辞ともいえるもので、ストックホルム、ロンドン、ニューヨークで同時に刊行された。

従ってその翌年、一九四三年にスタインベックがはじめてノーベル賞候補に挙がったとき、その名はのちに彼より先に受賞することにな

る二人の同国人をしのぐほどであった。

ヘミングウェイのときと同じく、スタインベックを候補とするについての報告書は老アカデミー会員ベール・ハルストレームに委ねられた。おそらく、彼がまだ若い技師であった頃、数年を北米に学んだという理由によるものであろう。

その上、ちょうど彼の北米滞在の時期は、オクラホマからカリフォルニアへの農民移住の時期と一致しているのである。カリフォルニアへ移住した農民たちを待っていたのは、大果樹園主たちのもとの、この上なく屈辱的な奴隷的労働であった。これは、十九世紀末には華やかだった西部の広大なブレイリー地帯が工業化されていく過程で起きた、悲劇的な段階だったと言わなければならない。

この経済的・社会的ドラマこそ、スタインベックの有名な小説『怒りのぶどう』の主題となっているものである。この小説は一九三九年に出版され、当時の批評家たちから一様に「二十世紀の『アンクル・トムの小屋』だ」と評された。

ハルストレームはこの作品を十分考慮に入れ、深い分析を加えている。そこには、事件の真实性と叙述の誠実さ——よくリアリズムといわれるもの——を見出すことができるが、その一方で心理描写が表面的で、構成全体に記念碑的な外観が欠けていると指摘している。しかし作品全体は「典型的にアメリカ的」であり、読後の印象は「まだ若い民族のもつ、驚嘆すべき力と勇氣」であると述べている。

しかしながらこの報告者（ハルストレーム）は、スタインベックの初期の作品群における二つの偉大な成功作には、あまり感銘を受けていないようである。

『トリーヤ・フラット』（一九三五年）に出てくるあのふざけたやぐざ者たちの中に、セルマ・ラーゲルレーヴのおちぶれてはいるが生まれのよい紳士たち、アメリカ市民となったイエスタ・ペルリングの仲間たちを認めようとしなさい。また『二十日ねずみと人間』（一九三七）における象徴的な手法、それをさらっと追い払う感情的な結末などを理解しているとは言いがたい。

彼はまた、ノルウェー戦争の小説風のルポルタージュというべき『月は沈みぬ』にも、あまり高い評価を与えがたらず、これは注文され

て作られた宣伝文句であり、情熱のないままに描かれ、占領者はヴェルコールの『海の沈黙』と同様の寛大さで、しかし生き生きとしたところがないまま扱われていると言う。

だが、ハルストレームは「長い谷間」（一九三八）の中の作品については、非常な讃嘆の念を表わしている。とりわけ『逃亡』という作品には「小傑作」ということばを与えている。これは、いたずらな白人の少年たちとつかみ合いの喧嘩をする混血のメキシコ少年の物語だが、「これはスタインベック芸術の到達し得た一頂点である」と言う。

要するに、スタインベックの作品は、たとえばノーベル賞のような栄誉に十分なほど円熟しているとは言いがたいが、その最近作は「おそらく多くの未来を期待させるに十分である」ということばで、この報告は結ばれているのである。

一九四九年、二度目の報告書でハルストレームは、このような変化に富んだ賞賛をもつ作家に対しては期待をもつて臨む態度は当然ではあるのだがと述べて、いくらか期待はずれだったことをほめかしている。

ところがまさにこの年から、スタインベックは数々の小説を著をはじめ、それらはよく売れた。しかもそれらは三十年代における彼の作品とは比べものにならぬというのが、大方の見方であった。

『われらが不満の冬』（一九六二）は、アンダーシュ・エステルリング氏がスウェーデン放送の桂冠詩人（受賞者）紹介の際に語ったところによれば、アカデミーに期待的な態度を捨てさせ、そのとまどいに終止符を打たせることになったのである。

ともかく、スウェーデンや他の諸国の膨大なキャンペーンによって、大西洋を越えて広まっていたあの噂、すなわちことしのアカデミー決定はチリの詩人、パブロ・ネルーダに下されるだろうという可能性は、これで全く砕かれたのである。

パブロ・ネルーダは共産主義の闘士であり、あのワシントンとモスクワを最も鋭い形で対立させたキューバ危機に際して、ケネディを精神病理学的実験にかけることを国連に要請したと自己宣伝すること、自らこの損な立場に立ったのではあるまいか。

スウェーデン・アカデミーが、たとえこの桂冠詩人決定によってアングロ・アメリカ民族の意見を満足させたに信じたにしても、それはたちまちくじかれることとなった。スウェーデンにおいては、怒号が新聞紙上にうずまいたのだ。「この選定はちっともおもしろくない」と、保守系の大新聞『スウェーデン日報』でさえ、この二十年間において最も政治的なこのノーベル賞を評して言った。「スウェーデン・アカデミーが犯した最大の誤ちであり、その権威を決定的に失わせる危険を犯すものだ」と、これは主要な社会主義系新聞『ストックホルム・テイニンゲン』に、スターリン賞受賞者であるアルチュール・ランドクヴィスト氏は書いた。

アメリカ合衆国の大日刊紙の中では「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」がただ一紙、その著作によって祖国に榮譽をもたらした息子として、この桂冠詩人を讃えたのであった。「ニューヨーク・タイムズ」紙は、この決定を残念なことであるとしたが、それは諸外国においてだけでなく、桂冠詩人のまさに祖国においてさえも、さまざまな異なった意見のあることを示すものであった。この新聞は、アルチュール・ミゼネル教授の署名入りで、次のように書いている。「スタインベックは、その才能は本物だが限られたものであり、彼の最もすぐれた作品においても安物の哲学的思弁がしみこんでおり、いわんや失敗作においては、まさにそれにひたりきついているといわねばならない」

この知識人ぶった批評家はさらに「怒りのぶどう」以来、スタインベックは実質的には本物の読者をもっていないと言う。

彼が榮譽を勝ち得たことについては、いろいろな理由がつけられよう。スウェーデン・アカデミーが多くくのヨーロッパ人と同様に、ここ三十年の間のアメリカの様子をよく知らないために、判断の基準をこの時代の規範というものにおき、とくに「感傷的な人道主義」を重んじたのだ。そのためにスタインベックにジャック・ロンドンの高貴な後継者を見たのだ、とも言えよう。あるいはもっと単純に、ベスト・セラー作家としての資質が、シンクレア・ルイスの場合と同様、この気高い集い（ノーベル賞選考委員会）においても無視できない魅力をもっていたのだ、とも言えるだろう。

イギリスの大新聞もそれほど感動してはいない。「マンチェスター・ガーディアン」紙は、「この親切な、身体の大きなカリフォルニア人」ジョン・スタインベックのうちに、この試験の時にあたって、祖国のためにどのような公式宣伝よりも効果的な評判をかちえた、穏健な理想的なアメリカ人を見ているのである。

『タイムズ』紙はもっと控え目な態度をとっている。「ぶどうの収穫期」という見出しで、このロンドンの大新聞は、フォークナーとヘミングウェイについてスタインベックがノーベル賞を受けるのは、避けられないことだと言う。それよりも、もっと驚くべきは、スタインベックが自分の番がくるのをこんなに長く待たなければならなかったことだ。ともかく、彼は新紀元を画したというよりもむしろアメリカ文学史における革命的時期の最後の代表者として、重要な役割を果たした。

彼も、また彼の五人の先輩も、ともに不滅の命を言うことはできないであろう。がしかし、（ノーベル文学賞を受けた）桂冠詩人のうちのいったいなん人が、不滅だと言えるだろうか。ノーベル賞受賞者の最初の肩書を得たシュリイ・ブリュム（トルストイは別だが）が犯したこの悲劇的な誤ち以来、このちぐはぐなコレクションにおいては、誰も不滅だとは言えないのである——と。

一方、『タイムズ・リテラリー・サプリメント』紙は、スタインベックの受賞はノーベル文学賞選考委員たちが、選考基準の真のあり方を弁解したものだとした。なぜなら、ノーベル科学賞の権威は年ごとに高まっていくのに反し、文学賞の方は年々失墜していくばかりなのだから。

スタインベック自身さえも口に出している彼の真の才能についての疑問は、たしかに多くの人が抱いているが、しかし「怒りのぶどう」の作者としての価値は、自らを十分弁護することができるだろう。それにしても、ノーベル文学賞はそれを受けたしろ、選考からもれたにしろ、スタインベック受賞によってそれ以前の受賞者の幾人かも議論の俎上にのることになる。なぜなら、たとえばパール・バックやクワジーモドのような作家を抜擢（へきだ）するために、ヴァレリーやマルローやブレイシュを選考委員が無視したとなれば、そのような国際的な賞をま

じめに受けることは、むずかしくなるだろうから。

もちろん、ある作家たちが選考から離れた理由を理解することはできる。たとえばブルーストやジョイスやD・H・ローレンス。彼らは大胆な改革者というべき人々であるが、長い間逆の評価を受けていたのだから——というわけだ。

ともかく、この非妥協的な批評家「タイムズ・リテラリー・サブメント」紙に言わせれば、ノーベル賞がしばしば小国の文学をも評価し、また穏健な詩人バステルナークや偉大なソヴィエト・ロシア文学者ショロホフを選ぶことによって明らかにしようとした「政治姿勢」すらも、もしこのように現代の生きた文学を無視しつづけるのであれば、いずれノーベル文学賞は「華麗だが無意味なお祭」になってしまうであろうというのだ。

ところがフランスの新聞の論調は、少し様子がちがう。「ル・モンド」紙上でマルセル・ブリュン氏はスウェーデン・アカデミーの決定に対して祝いを述べて、次のように言っている。桂冠詩人が、その選考過程において「日本の川端や、その作品はすばらしく、また私に言わせれば小説よりも詩において勝っているイギリスのロバート・グレイズや、あの偉大なバプロ・ネルーダ等の競争相手の中から、栄冠をかち得たのはめでたいことだ」と。

さらにブリュン氏は、スタインベックにおいて讃えるべきは、「その作品において詩的感情が社会的配慮と同じくらい重要な役割を果たしており、変化に富んでいることである」としている。

たとえば「その作品の世界、即自的な世界を創造するにあたって、ヘミングウェイのような叙事詩的息吹きも、妄想家ともいえそうなフォークナーのような能力も、持っていないとしても、やはりスタインベックは「偉大な物語作者であり、まさにその点こそ彼の非常な長所だと言わなければならない」と。

『スーペル・リテレル』紙のレイモン・ラス・ベルナス氏はブリュン氏ほど寛大ではない。「ストックホルムが現代アメリカの最高の小説家に栄誉を与えたいというのなら、なぜドス・パソスを選ばないのだ。彼が文学と人間生活にもたらしたものは、より大きなものではない

かったか。しかし、こんなことを議論してみたところではなにかう。決定は下されたのだから。スタインベックに」

この愛すべきフランス人は、アメリカのハイブラウたちが長いことスタインベックのことを、地方主義的な作家、大衆作家であってそれ以上のものではないと言ってきたことを、よく知っているのである。

彼は次のような意見を述べている。「明日のスタインベックがどのようなことになるしろ、ただいまから彼は、高潔な怒りと非常に稀な才能の豊かさをもって、最後のアメリカンディアンと最初のビート族の間をしっかりと結びつけている、あの永遠の放浪生活の手本となるだろう」

さて、桂冠詩人自身はどうであつたらう。彼は好ましいユーモアと泰然自若たる落着きをもって批判者たちに答えたのであつた。

「ノーベル賞は私にとって一種の報酬です」ストックホルム到着直後、アメリカ大使館へ感想を取材に来たジャーナリストたちに向かって、彼はこう言つたのである。

自分自身がノーベル賞にふさわしいと思うかどうかという質問に対して、彼は同輩や友人だれかれの五、六人の名を挙げ自分が受賞するなら少なくともこの人たちは受賞に値するはずだと言つた——アーサー・ミラー、カール・サンドバーグ、ジョン・ドス・パソス、アースキン・コールドウェル、ロバート・フロスト、テネシー・ウィリアムズ等であつた。そして彼は次のようにことばを結んだのだ。「人間は決して自分に値するものを得ることがない。また、自分の得たものに値することもないのだ。私がノーベル賞を与えられたのも、またそれを受けとつたのもショックであつた……それに、もし受賞を断つたとしたら、おかしなことだつたらう」

だれも、いままدةこんなふうと言つたことはなかつた。勇敢なスタインベックは、このような発言が世間の口やかましさをなおさら増すということをも、多分考えてもみながつたのだらう。

恒例のごとくコンサート・ホールで行なわれたノーベル賞授賞式で、他の五人の科学賞受賞者たち（みなイギリスおよびアメリカ人だつたが）とともに叙勲され、壇上にすわつたこのおとなしく、身体の大き

な気むずかし屋は、いままで着たこともない黒の盛装に身をかためながらも、とても気楽そうにふるまい、短いひげの間からくつろいだ微笑を見せたりして、優雅な列席者たちの視線を集めていた。

スウェーデン・アカデミーの常任理事であるエステルリング氏は、ジョン・スタインベックへの祝辞の中で、アメリカの批評家たちに抗議しつづけた。とりわけ、この六十歳になる受賞者のうちなる創造力が弱まりはじめたとする人々に対して抗議し、もう一度、赤裸々な真実への情熱的な愛情と『われらが不満の冬』に見られる豊かなユーモアとを望んだのであった。あの『怒りのぶどう』や、三十年の間に広く世界中から称讃された諸作品のような作品を、と。

この非常に私的な敬意の表現に、明らかに感動した人の好い大男は、軽い足どりで階段をおりて、グスタフ・アドルフ国王の長い祝福を受け、満場の熱狂的な拍手を浴びたのであった。

式典につづいて催された大晩さん会でスタインベックは演説し、その中で、『尊敬し崇拝している他の文学者たちをさしおいて、この私に果たしてノーベル賞を受けるに値するものかどうか、心中疑いがないわけではありませぬけれど、しかし、自分が選ばれましたことに對して、喜びと誇りを感じますことは申すまでもありません』と言った。実際、彼は心の中で、自分が愛したり、尊敬したりしている誰かれを思い浮かべてみて、自分の威厳については疑問をもっていたのだ。

その一方、彼は次のように言っている。「ノーベル賞の権威、並びに今私が立っておりますこの場所の威信を考えますとき、どうしても私は、温情に感謝しながら自分の未熟を釈明する二十日ねずみのような情けない口調で語るわけには参らない。自分の職業に対する自負と、何百年もの昔から同じ仕事を実行して来た偉大にして善良な先輩たちに対する誇りから、いきおい私は獅子のように咆哮することになろうかと存じます」

こうして情熱的に彼はつづけるのである。「作家の使命は、古代以来、少しも変わっておりませぬ。われわれ人間の、幾多の嘆かわしい欠点や失敗を剔出し、改善を図るが故に暗黒の危険な夢を洗いざらい白日の下に曝け出すこと、これが作家に託された任務であります」

彼は結びに作家の役割を定義するために、聖ヨハネの福音書冒頭の

ことばを次のように言い換えた。「終わりに言葉あり、言葉は人なり、言葉は人と共にあり」

祭典に集う、およそ八百人あまりの会食者の中で、このような場所でジョン・スタインベックほど「ところを得た」人はないということ、このとき誰も疑わなかった。

(平田圭子訳)

スタインベックに対する

ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事

アンダーシュ・エステルリング

一九六二年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

本年度のノーベル文学賞受賞作家ジョン・スタインベック氏は、カリフォルニアの小邑サリーナスの生まれであります。太平洋岸から数マイルほど内陸に入ってサリーナス川を抱く、地味肥沃なこの地方一帯は、氏が作品の中で庶民の日常生活の様々な姿を描いてみせた、その背景をなしている所であります。中産階級の家庭環境に育ちながら、氏は、かなり雑多な社会階層が入り混っているこの地方の、労働者たちとも親しく対等につき合いました。スタンフォード大学に学んだときには、自ら農場に働いて生計をたてたことも珍しくありません。スタンフォードを中途退学した氏は、一九二五年、一介の無名作家としてニューヨークに参ります。それから数年、口を糊するための苦闘が続きますが、やがてカリフォルニアに帰った氏は、海沿いの淋しい田舎家に家庭を営まれます。そしてそこで氏の執筆生活が続けられることになりました。

一九三五年までに氏は、数冊の本をすでに書いておりますけれど、世間的な成功を収めたのは、同年に発表された『トートレーヤ・フラッ

ト』が最初でありました。これは一団のバイサノたちを描いた風流滑稽譚であります。この社会の枠にはまらぬ人たちの桁外れな交歓の図には、アーサー王の円卓騎士団の戯画を思わせるものがあります。合衆国にあつては、この本は、当時の社会全体を蔽った不況に苦しむ民心の暗さを払う解毒剤として歓迎されたと言われますが、おかげで今度は、スタインベック氏自身が笑う番になったわけであります。

とはいふものの、ただ単に読者を慰め楽しませる娯楽読物を提供することは、氏の意図するところではなかった。氏が取り上げる題材からして、社会を弾劾する深刻な性格を持つております。例えば小説『勝敗のわからぬ戦い』(一九三六)に描写された、カリフォルニアの果実や綿の大農場の激しいストライキの模様など、その好例と申せましょう。この数年間、氏の筆力もまた、着実な進展を示しております。

愛らしき傑作とも称すべき『二十日ねずみと人間』(一九三七)、これはレニーという巨大な体格を持った精悍者が、ただただ心優しい愛情ゆえに、手に触れるすべての生き物を絞め殺すことになる話ですが、これに続いては、独特の魅力を持った無類の短編小説を一巻に集めた短編集『長い谷間』(一九三八)が出版されました。かくていよいよ、スタインベックといえは、多くの人がただちに連想するであろう傑作『怒りのぶどう』(一九三九)登場への地ならしが完成するわけであります。叙事詩の風格を持ったこの一大長編小説は、失業と権力の濫用とによって土地を追われたオクラホマの人々の一団が、カリフォルニアに移住してゆく物語であります。合衆国の社会史におけるこの悲惨なエピソードに深く胸を打たれたスタインベック氏は、一人の農民とその家族とが、新しい家郷を求めて果てしない旅を続ける悲痛な姿の中に、これをなまなましく描写せずにはおれなかったものであります。

それ以後も氏は、幾つもの作品を発表しておりますけれど、それを一々説明することは、この短い紹介演説のとうていよくすところではありません。批評家たちは、時に、氏の作品に迫力減退の跡を認め、同一テーマの反復的兆候を指摘しました。氏の創作力の衰退をうんぬんしたようでありますが、昨年出版されました小説『われらが不満の冬』は、彼らの危惧を見事に一掃してくれました。この達成は、氏の筆力が、往年の『怒りのぶどう』におけるそれと少しも変わらぬことを示しております。美点にしる欠点にしる、アメリカの真の特色ともいうべき要

素を探り当てる公正な直感力をもって、いかなる外圧にも左右されず、に真実を描いてみせる姿勢、そういう氏の姿勢がここには再び確立されております。

小説としては最も新しいこの作品は、零落した一家の主人が中心であります。第二次大戦に参加した後、すること為すことがうまく運ばず、遂に彼は、先祖代々住み継いできたニューイングランドの町で、ある食料品店の店員という冴えない仕事にありつきます。彼は正直な人間で、いたずらに不遇をかこつことは致しません。だが、物質的成功を手中にできる方策が眼前にちらつことは致しません。しかし、その方策には、抜け目の無さと冷酷さと、この二つが是非とも必要なのですが、そういう人間になることはすなわち彼の人格の崩壊を意味します。そして彼の良心を通して、アメリカの福祉計画にからまる一切の問題がなまなく展開され、プリズムのように明るく照らし出されるのです。それが図式化された観念として述べられるのではなく、具体的な、瑣末なとも言いたい日常的状况を通して示されるのですが、瑣末などとは言いがた、スタインベック氏の力強い現実把握の描写力をもって描かれるとき、それは強い説得力をもって読者に迫ります。氏はあくまで現実を追求するのでありますが、そこにさえ、生と死という永遠のテーマをめぐって模索する考察が、白日夢にも似た諧調を奏でていることも事実です。

スタインベック氏の最近作は、アメリカの四十の州を三カ月にわたって歴遊した氏の体験の記録『チャリリーとの旅』一九六二であります。小さなトラックに簡単な小舎を取りつけ、ここに必要品を積み込み、ここで眠り、黒のブードル一匹の伴に、氏はお忍びの旅を続けました。氏がいかにか練達の観察家であり推論家であるか、それはこの一本に歴然としておりますが、地方色を掘り起こしたこの一連の卓抜な調査は、氏の祖国とその国民の再発見と申せましょう。同時にそれは、くだけた形で書かれた痛烈な社会批判の書ともなっております。ロシナンテ——というのが氏がそのトラックに命名した名前でありますが、このロシナンテの旅人は、いささか新しきをすてて古きをとる傾きを示します。とはいふものの、ご当人が、そのように流れがちなおのが心に警戒を怠らぬことは明らかに看取されますけれど。「なぜかくもしばしば、進歩は破壊の姿をとるのであろう」熱に浮か

されたように振がってゆく住宅地を確保し、摩天楼を聳え立たせる区域を開発するために、緑したたるシアトルの森林がブルドーザーによって切り開かれてゆくを目撃した氏が、そう述懐する所があります。これは、是非はともかく、アメリカ以外の国にも当てはまる、現下の最も切実な感懐ではないでしょうか。

スタインベック氏は、シンクレア・ルイスからアーネスト・ヘミングウェイに至る、すでにこの賞を与えられた現代アメリカ文学の巨匠たちの間にあって、独自の地歩と成果とを十二分に發揮しておられます。氏の中には一条の苦いユーモアが流れていて、これが、しばしば氏の取り上げる悲惨な主題に一抹の救いを与えております。氏の同情は常に、虐げられた者から社会に適合できぬ者へ、困窮する者へと向けられます。そして、素朴な生の喜びを好んで取り上げては、これを残忍冷酷な金銭欲と対照的に描きます。しかしわれわれは、氏の中に、自然に寄せる氏の大きな共感の中に、アメリカ人の国民感情を見出します。耕作地、荒地、山岳、海岸、すべてこれスタインベック氏にとつては、人間の世界の中であって、そしてまた人間の世界を越えて、尽きることのない靈感を生み出す源泉に他なりません。

スウェーデン・アカデミーがジョン・スタインベック氏にこの賞を授与する理由には「暖かなユーモアと鋭い社会認識を特色とする、リアリスティックであると共に想像的なその文学的達成のために」と記されております。

親愛なるスタインベック氏よ。貴下は貴下の祖国はもちろん、すでに全世界にその名を知られた作家であります。このスウェーデン国民にとつても例外ではありません。そのまことに個性的な著作の数々を通して、貴下は善意と博愛の精神を教え、人間の価値を擁護された。これすなわち、ノーベル賞本来の理念にまことにふさわしいものと申せましょう。私は、スウェーデン・アカデミーの祝意を表明すると共に、貴下が本年度ノーベル文学賞を国王陛下御自身より受け取られんことをここに要請するものであります。

(野崎 孝訳)

受賞演説

私は、私の仕事を、この最高の名誉に値するものとお認め下さった
スウェーデン・アカデミーに対し、感謝の意を表します。

尊敬し崇拝している他の文学者たちをさしおいて、この私が果たして
ノーベル賞を受けるに値するものかどうか、心中疑いがないわけでは
ありませんけれど、しかし、自分が選ばれましたことに對して、喜
びと誇りを感じますことは申すまでもありません。

この賞を受けた者は、文学の本質なり、動向なりに関して、個人的
な感想ないし学問的論評を述べるのが慣わしになっておりますけれど、
私は、この際なるが故に、文学創作者の持つ高い義務と責任、これ
について考察するのにもまたふさわしいことではないかと存じます。

ノーベル賞の權威、並びに今私が立っておりますこの場所の威信を
考えますとき、どうしても私は、温情に感謝しながら自分の未熟を釈
明する二十日ねずみのような情けない口調で語るわけには参らない。
自分の職業に對する自負と、何百年もの昔から同じ仕事を實行して來
た偉大にして善良な先輩たちに對する誇りから、いきおい私は獅子の
ように咆哮することになろうかと存じます。

文学は、人気がない教会の中で祈禱を獻げる、青白い、去勢された
ような、批判のみをこととする僧職者たちによって扱われたものでは
ない。同時にまたそれは、他人の喜捨にすぎりながら低カローの絶
望を弄ぶ見かけの修道士のような浮世を離れた選ばれた人々のため
の遊戲でもありません。

文学は談話と同じに古く、人間がそれが必要としたが故に生まれ、
爾來事情は少しも変わっておりませぬ。変わったといえ、ますます
それが必要とされてきたということぐらいのものでありましよう。

吟唱詩人といい、放浪詩人といい、作家といい、彼らだけが別個な

孤立した存在ではない。彼らの機能、彼らの義務、彼らの責任は、そ
もそのもの最初から、われわれ人類の要求によって創り出されたのであ
ります。

人類は今、わびしい灰色の混乱期を経過しております。私の偉大な
先達ウィリアム・フォークナーは、この場所において行なつた演説の
中でこの点に言及し、世界全体を恐怖が包む悲劇的狀態があまりにも
長く続いた結果、精神の問題が消え失せてしまつておる。だからして
自らと闘う人間心情の葛藤こそが、書くに値する唯一のテーマとなつ
たようだと語りました。

フォークナーは、誰にも増して、人間の弱さと共にその強さをもわ
きまえた人であります。彼は、恐怖を理解してこれを解消せしめるこ
とが、作家の存在理由の大きな部分を占めることをよく承知しており
ました。

このことは、何も今に始まつたことではない。作家の使命は、古代
以來、少しも変わっておりませぬ。われわれ人間の、幾多の嘆かわし
い欠点や失敗を剔出し、改善を図るが故に暗黒の危険な夢を洗いざら
い白日の下に曝け出すこと、これが作家に託された任務であります。
のみならず作家は、人間が、偉大な精神、偉大な心情を發揮し得るこ
とを實例で示し、これを賞揚する仕事をも委託されております。例え
ば毅然として敗北に処する姿、勇氣、同情、愛の實証。これらは、怯
懦と絶望に抗する果てしなき戦いにおいて、希望と闘志を象徴する輝
かしい旗印にはかなりません。

人間の完全性に熱烈な信頼をおかぬ作家は、文学に献身する資格も、
文学者の仲間に入る権利もないと私は言いたい。

現下の世界的な恐怖は、物質界における幾つかの危険な要素に對す
るわれわれの知識と操作とが、激烈な前進を見せた結果であります。

他の分野におけるわれわれの理解力が、この巨大な前進にまだ追いつ
けずにいることは事實ですけれど、將來とても、もしくは永久に、
それが不可能だと考えるべき理由は一つもありません。事實、それを
間違ひなく追いつかせるようにすることもまた、作家の責任の一部な
のであります。

自然の敵に對して、時にはほとんど確実とも見えた敗北と絶滅の危
険に直面しながらも、確乎として持ちこたえた誇らかな長い歴史を持

つわれら人類であります。最も偉大な勝利を収める可能性のある戦いの前夜に、戦場を棄てるとしたら、それは卑怯でもあり愚劣でもないでしょうか。

私はアルフレッド・ノーベルの生涯を読みましたが、伝記は彼を孤独の人、思慮深い人と語っております。これはうなずけるところであります。彼は爆発力の解放を完成致しました。この力は、創造的な善を生み出すこともできれば、破壊的な悪を生むこともできるけれど、その力自体には選択能力がなく、良心とか明識とかいったものによって統御されておらぬわけであります。

ノーベルは、彼の発明が、誤って残酷な血腥い用途に用いられる例を幾つか目撃した。彼は、彼の探究が、窮極においていかなる結果をもたらすか——終末的な暴力、最後の破壊、これに行きつくということを見えさせていたのかもしれない。彼はシニカルになったという人もおるけれど、私は信じません。彼は何らかの制御装置を、一つの安全弁を、発明しようと努めたのだと私は思います。そうして、それには結局のところ、人間の心、人間の精神しかないと思たのです。そういう彼の考えは、各分野にわたるこの賞そのものに、実に明瞭に現われていると私は考えます。

この賞は、人間と人間の世界とに対する知識を増大し、これを持続してゆくことのために与えられる。つまりは理解と伝達のために与えられるわけですが、この二つはすなわち文学の機能でもあります。そしてまたこの賞は、すべてがこの一点に帰する最高の帰結ともいべき平和の可能性、これを実証するものに与えられるのではありませんか。

ノーベルの歿後五十年を経ずして、自然の扉は開かれ、われわれは恐るべき選択の重荷を負わされました。

かつては神に委ねていた力の多くを、われわれはこの手に奪い取ったのであります。

恐怖にあふれながら、その用意もないままに、われわれは全世界、全生物の生死を宰領する地位を篡奪したのです。

危険も栄光も選択も、一にかかって人間にある。人間の完全性が試される時はまさにさし迫っております。

神にも比すべき力を手中にしたわれわれは、かつては祈りのうちに

神に託した責任と叡智とを、われわれ自身の中に求めねばならないのです。

人間そのものが、今やわれら最大の危険を孕む存在であると共に、われらが希望を託す唯一のよすがともなったのであります。

従って今日では、使徒ヨハネの言葉はこう言い換えてもよろしいのではないのでしょうか——終わりに言葉あり、言葉は人なり、言葉は人と共にあり、と。

この受賞演説に先立って、王立科学アカデミー会員R・サンドラー氏は、次のような挨拶を述べた——「ジョン・スタインベック氏、あなたは、各国の民衆に広く歓迎された数々の著作において、あなたが、悲劇的に喜劇的状况における人間の行動の実に大胆な観察者であることを示された。それをあなたは、まことに力強い、あくまで写実的な筆致でもって、全世界の読者大衆に描いてみせてくれたわけであり、あなたの『チャリーとの旅』は、アメリカの探索であると同時に、その啓示でもあります。あなた御自身の言葉を借りるならば、『世界最強にして、未来を生み出す卵の塊にも似た、この怪物的な国アメリカ、これが実は、私という小宇宙を拡大した大宇宙にほかならぬことがわかった』のであります。真にアメリカ的なものを見抜く直覚的洞察力によって、あなたそのものが、アメリカの生活を忠実に体现した見事な典型となったと申せましょう。」

(野崎 孝訳)